待降節第１主日　マルコ 13：33～37　救いの完成に向けた励まし

今日の福音では「目を覚ましていなさい」と、“終末”について朗読されます。“終末”には、「世の終わり」、私たちの生き方が「裁かれる」「審判」の意味があります。だから、怖ろしく感じてしまうこともあります。一方、“終末”には、この世の営みを通して「救いの完成」に向かっているという積極的な意味があります。今日の福音のメッセージも、「救いの完成」に向けて「目を覚ましていなさい」という励ましです。たとえぐらつく時があっても、大丈夫、という励ましです。

もう７年前になりますが・・・若い先生たちに混じって、広島でのモンテッソーリのコース（幼稚園の教育方法の１つで信望愛学園の先生たちはこのディプロマを取ることが求められます）に、1 年間、毎月１週間、ホテル暮らしでコースに通っていました。11 月は、広島入りする前から体調を崩していて、途中、点滴を受けたり、ホテルで一日休んでいる日もありました。休んでいる間に、講義はどんどん進んでしまいます。でも、気力が湧かなくて、ホテルの部屋で自習する気にもなりません。毎回、土曜日には総練習と言って、１週間学んだことを試されます。「あなたしてみて下さい」と模擬授業（提供）のように当てられます。「そうなったらどうしたらいいのか？」怖ろしさにとらわれて、不安で、夜もよく眠れません。（裁かれる不安）

そして、土曜日の朝、朝礼が終わると私は気持ちが悪くなって、トイレに駆け込み、吐き気でむせっていました。しばらくして、席に戻ると、「提供」という模擬授業はすでに始まっていました。頭がぼっーとしながらメモし続けました。休憩時間になって、みんなから「大丈夫？　大丈夫？」と声をかけてもらいました。心配してもらったのは、実は私が最初の模擬授業役に当てられていたのに、トイレに行っていつまでも帰って来ないから別の先生が当てられていたからでした。私は、複雑な思いでした。今日当てられたら、全然できなかった。動揺して冷や汗をかいていた。逃げられて助かったという思いと、別の人が代わりにしてもらった申し訳なさが入り混じりました。私はヨレヨレ、ふらふらでした。（裁かれる不安と思わぬ助け手の登場で救われる体験）

モンテッソーリの勉強をしながら「自分は幼稚園の先生になるんじゃなくて司祭になった。どうしてこんな苦労をするのか？」という不満の気持ちと、人から心配されて、助けてもらった申し訳なさが入り混じりました。足元がぐらついていて「情けない自分」を感じました。（裁かれたらもうダメ、という諦め）

「目を覚ましていなさい」とは、「神様が示す道を信じなさい」ということです。司祭に導きだした神様には、必ずお考えがある。今は、ぐらついているけれども、道は用意されている、そう信じ直すことが大切だと思いました。　あの時は、ぐらついていましたが、ディプロマも取れました。コースと保育を両立させる先生たちの苦労もわかりました。園長の役割もわかってきました。「幼稚園で奉仕しなさい」という神様の思いが見えてきました。

私たち、それぞれにぐらつく時期があります。「それでも、神様の道を信じられたら、今も救い

に向かって歩んでいる」と理解できます。　トイレに駆け込んで、別の人に代わって貰ったとしても、それも救いの途上だと理解できます。　神様はいろいろな手で励ましてくれます。ぐらついても、神様が用意してくださる道を信じ直す。そんな待降節にしていきましょう。